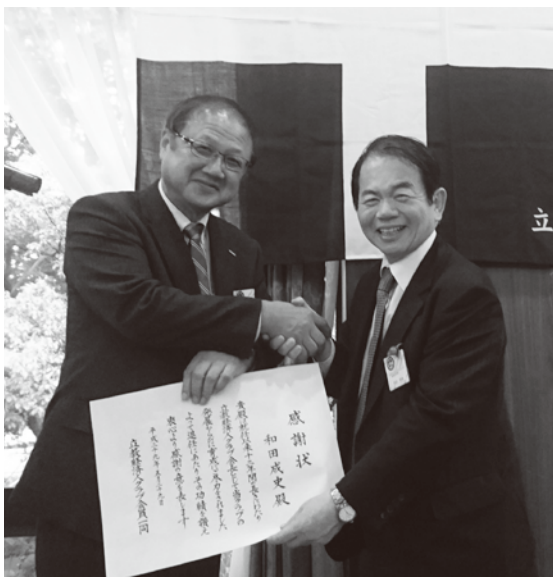
Rikkyo Club of Executives & Professionals
立教経済人クラブ

発行所：立教経済人クラブ　発行人：和田成史　編集人：徳澄範光　事務局：TEL.03−3985−3135　http://www.r-keizaijin.net/

立教経済人クラブ第37回定期総会



2017年5月29日（月）午後5時30分より、毎年恒例となる「立教経済人クラブ第37回定期総会」が日比谷松本楼にて開催されました。

総会は第1部の定期総会、第2部の講演会、第3部の懇親会と三部構成で行われました。

第1部の定期総会は総務委員長湯浅修氏（S59産・株式会社ブレーン代表取締役社長）が司会者となり、総会に先立って物故者の報告と黙とうを全員で行いました。その後、司会者が開会を宣言し、会則により議長に会長である和田成史氏（S50営・株式会社オービックビジネスコンサルティング代表取締役社長）が指名され議事の審議に入りました。

1号議案の事業報告、3号議案の事業計画案は井口一世事務局長（S53営・株式会社井口一世代表取締役）より、2号議案の決算報告、4号議案の予算案は守屋裕之財務委員長（S60営・ソニー生命保険株式会社トップ・オブ・エグゼクティブライフプランナー部長）より、監査報告を北岡修一監査委員長（S55営・東京メトロポリタン税理士法人統括代表社員）よりそれぞれ報告され、満場一致で承認されました。続いて、5号議案役員改選案について、井口事務局長より内容の説明が行われました。和田会長が校友会会長に就任されたことにより、当クラブ会長を退任し最高顧問になられること。立教経済人クラブの新会長に戸井田和彦副会長（S50営　株式会社ファルテック代表取締役社長・CEO）が就任し、副会長に井形博史氏（S61営　三井金属アクト取締役兼専務執行役員）が新たに就任されることが上程され、こちらも満場一致で承認されました。以上で総会が無事閉会しました。

その後、会長を退任された和田氏より、12年間会長職を全うできてほっとしている、校友会会長としてこれからも立教のために頑張りたいとご挨拶をいただきました。続いて、新会長に就任された戸井田氏が会員一同を代表して、これまでの和田氏への功績に対して、感謝状と花束を贈呈いたしました。また、運営委員会を代表して井口事務局長より、これまでのご厚遇へのお礼としてクリスタル製の盾と記念品の目録が贈呈されました。最後に戸井田新会長より一言ご挨拶をいただき、第一部が終了いたしました。

引き続き午後6時より、第2部の講演会が開催されました。今回は、戸井田新会長の恩師でもある、野田一夫立教大学初代観光学科長より、「人生いろいろ―卒寿を前に、様々な出会いを考える―」と題してご講演をしていただきました。（講演内容については2頁にご紹介しております）

午後7時からは第三部となる懇親会です。会員、ゲスト、来賓を併せ、総勢100名を越える参加者となりました。

引き続き、湯浅総務委員長の司会で開宴となりました。まず、戸井田新会長より開宴の挨拶として、総会で会長職に任命され、和田氏の後任となり大変プレッシャーを感じているが、頑張っていきたい。野球部が昨日（5/28）六大学リーグで優勝。立教らしくそっと決めた感じ。これまで、社会人として得がたい経験をしてきた。経済人として、野田先生の言う企業家として、校友会、大学と協力して、若い企業家を育てていきたいとご挨拶されました。

続いてご来賓を代表し、吉岡知哉立教大学総長より、ようやく野球部が六大学リーグ優勝を決めた。35季ぶりといっているが、春リーグでは51年ぶりの優勝で大学選手権に出場することになる。週末は、野球の事だけでなく大変悶々としていた。法務研究科を閉鎖することを決定したり、野球部が優勝できなければ始球式のできばえが散々だったためだとか、考えていたが無事に厄落としができたことでホットしている。大学では、立教ビジョン2024と題して様々な活動を行っている。留学生の受入人数も年々増えている。目立たないこともあるが、これまでボランティア活動を行ってきた陸前高田市との交流もサテライトキャンパスという形になっている。派手な宣伝はできていないが、業界からは高い評価を得ているとご挨拶されました。

その後、来賓の方々のご紹介を司会者よりさせていただき、さらに、新春名刺交換会以降に入会された3名の新入会員の紹介と記念撮影を行いました。

続いて、和田成史立教大学校友会会長より、経済人クラブの会長職を戸井田氏に引き継げてほっとしている。週末の早慶戦では、慶応側のスタンドで早稲田が得点した際に喜んでしまったこと、松本楼の小坂社長の計らいで乾杯用のシャンパンを優勝記念として用意していただいたことをご紹介いただきました。立場が変ると、話す内容も変ります。校友会の一大イベントである10月のホームカミングデーでは、新しい試みとして、大福引大会の規模を校友会55周年にちなんで、550万円相当の景品を用意したい。皆さんにも1口10万円で積極的なご協力をお願いしたい。校友会は4月になって会員が20万人を突破した。女性と平成卒が半分以上になった。これからは、女性と若い人が参加することが、校友会も、経済人クラブも活性化につながるので、そうした活動を行っていきたいとご挨拶いただきました。その後、乾杯のご発声をいただき、懇親会がスタートしました。

松本楼の美味しい食事とお酒に加えて、同友、先輩、後輩等様々なつながりの中で、今回はなんと言っても、野球部優勝の話題、和田校友会会長と戸井田経済人クラブ新会長を囲んでおおいに話に華が咲きました。

最後に、新しく副会長に就任された、井形博史氏に一言ご挨拶をいただき、中締めの一本締めをしていただき閉会となりました。

※文中の所属会社等の肩書きは、総会当時の肩書きで記載させていただいております。

―品川 高穂　H8済―

定期総会講演会「わが人生を回顧して」

講師：野田一夫氏

総会の第2部では、新会長に就任された戸井田氏の恩師・野田一夫先生に講師としてお越しいただき、一学究としてのこれまでの先生独特の人生の歩みについてのお話を伺いました。先生は、1958年の本学の社会学部新設時に若き一専任講師として赴任された頃、すでにドラッカーの学説の日本への紹介者などで、産業界に広く名を成しておられました。

1960年夏からの2年間のMITフェローとしての米国滞在から帰国後は、先生は著名な経営学者として社会的に華々しく活躍される一方、本学に新設された本邦初の観光学科の学科長までもつとめられました。その後本学在任中も、学外で（財）日本総合研究所初代所長や（社）ニュービジネス協議会初代理事長などを兼任され、本学定年退職後には、多摩大学・県立宮城大学・事業構想大学院大学の初代学長まで歴任されました。以下の一文は、当日の先生のご講話の内容に、先生ご自身が多少加筆をされたものです。

航空技師の夢破れて文系に転じ、マックス・ウェーバーに憧れて東大社会学科入学

私の先祖は代々南部藩士でしたから、わが野田家の故郷は東北の盛岡市。明治生まれの父は盛岡中学生の頃、ライト兄弟が人類で初めて空を飛んだという快挙にいたく感動し、担任の先生に「なんで鳥でもない人間が空を飛べたのか?」と質問したところ、返答に窮したその先生は「大学へ行け!」とだけお答えになったそうです（笑）。

…とは言っても、当時の日本では、大学と言えば東京大学一校だけでしたから、父は多分猛勉強を重ねた末に東大理学部物理学科に入学を果たしましたが、当時の東大には航空機の専門家は居なかったため、父は卒業後ドイツに留学までして猛勉強を重ね、日本の航空技師の先駆者となり、第一次大戦後戦勝国間で起こった“軍用機ブーム”の最中に日本では三菱財閥がつくった航空機製作所に、技術部門の総責任者として迎え入れられました。

私は少年時代から、そんな父を心から尊敬し、誇りにし、将来は父を超える航空技師になろうと志しておりましたが、とくに父の部下で“零戦”の設計主任として国内外に名を成した堀越二郎氏が、私の生まれた年に東大工学部航空学科を卒業して三菱航空機に入社したことを知って以来、東大の航空学科入学が、少年の私の一途の人生目標になりました。

しかしながら、その人生目標は“達成の一歩前”とも言える旧制高校二年時,“太平洋戦争”の敗北によって脆くも崩れ去りました。占領軍総司令部は早々と「日本における航空機の製造ならびに保有は永久に禁止する」という指令を出すや、東大工学部航空学科も廃止の憂き目に会ってしまったからです。

更に、敗戦直前の日本では、都市と言う都市のみか、工場と言う工場まで米国空軍による長期にわたった徹底した空襲で破壊し尽くされて、大学工学部出身者の卒業後の就職は困難視されたことから、文部省は「（旧制）高校理科在学生の文科への無条件転科」いう特別措置を講じました。

結果として、当時の多くの旧制高校理科在学生は一斉に文科に転じましたが、私はなかなかその気にはなれず、結局、期限ぎりぎりになって、一年遅れで余儀なく文科に転じた次第です。

文科に転じて先ず感じたことは、同じく“科学”と称しながら、社会科学では自然科学と全く対照的に、教科内容が教える先生によってまるきり違うと言う納得できない現実でした。以来今日まで私は、社会“科学”と言う表現を使わないことにしてきています。やはり、“科学”と言う概念は、あらゆる意味で、自然科学にこそふさわしいと、私は信じています。

さて、当時学生の間ではマルキシズムが圧倒的影響力をもっており、ひどく偏った主義主張だと感じつつも、私も人並みにマルクスやエンゲルスの著作を読んでは友人達と観念的議論を戦わせたものでしたが、その頃のある日先輩の一人が「これを読め!」と手渡してくれた一冊の翻訳書、マックス・ウエーバー著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、が、正に私の人生を変えました。

東大の伝統的社会学に失望し、卒業後、新設の立教大学社会学部教員となる

その書の冒頭を飾っていた著者の知性と気品に満ちた容貌にふさわしく、その書には、（マルクス主義者が攻撃の的とした）近代資本主義が、その成立期においては、如何に徹底した合理主義の精神に基づく“禁欲的職業倫理”に支えられていたかという史実が、十二分の文献に基づく著者の完璧な説得力をもって語られていました。

現代資本主義を批判するマルクス経済学に決定的に不足していた“実証性”にひそかに反発を感じていただけに、私はウェーバーがドイツの高名な社会学者であることを知るや、「…それが日本の大学ではなぜ文学部に所属するのか」という疑問を抱きながらも東大社会学科入学を志し、無事合格を果たしました。…が、一学生としていざ講義を通して多くの教授の方々の言説に接すると、少なくとも当時の東大社会学科、いやその学科が主導していた当時の日本の社会学界の実情には、私は大きな失望を感じざるをえませんでした。

“社会”学と称するからには、当前のことながら、政治とか経済とか産業といった現代社会の中枢的部分に研究の焦点を向けるべきですが、当時のそして言わば現在でも、日本の社会学者の大部分は、「農村の家族制度」とか「都会の非行少年の実情」と言った、現代社会の言わば周辺部分に研究の焦点を当てたがるその“負け犬根性”が私には最も嫌でした。

もっとも、当時の東大経済学部も教授陣の大勢は“マル経”論者でしたが、若手を中心にいわゆる“近経”が台頭する機運はすでに濃厚でした。しかし、社会学科には全くそうした機運は感じられなかった中で、幸い教授陣の中にはたったお一人だけ、超例外的教授がおられました。その名は尾高邦雄。当時兄上は東大法学部長で弟さんは日本交響楽団の常任指揮者、その上、渋沢栄一の孫に当られて、わが国で率先“産業社会学”を開拓された方で、それこそ何から何まで教授陣の中では超例外的存在であられました。

私はもちろんその尾高先生のゼミに入り、思う存分講壇社会学を徹底的に批判しつづけながら卒業し、会社員にでもなろうかと考えていたところ、卒業時には（多分、尾高先生の強いご推薦で）全く思いかけず、当時「大学教授の登竜門」と謂われていた（相当な奨学金つきの）大学院特別研究生に選任され、結果として、大学教授人生を歩むこととなりました。

…と言っても、職場となった東大社会学科の研究室の室内は、昼間でも物理的に暗い上に、同室の仲間であった助手・副手や先任の特別研究生がかもし出す社会的雰囲気もそれに劣らず暗く、遂に我慢が限界に達した私は2年目に「お暇頂戴」を申し出たところ、「…そんなに相性が悪いなら、仕方が無い」と納得された尾高先生のご紹介で、1年後、当時丁度（文学部の一学科から）独立した社会学部新設を果たした立教大学に、専任講師として就職することになり、思いがけず“大学教授人生”を歩み始めることになったわけです。

立教大学教員として、私は人生で自らの個性を存分に発揮できたことに満足している

今改めて振り返ってみると、立教に在籍した約30年間、私は一方では“教員”として、東大生などより遥かに都会的に洗練されて明るい学生たちと思う存分交流しながら、他方では、“暗くて野暮ったい”日本的社会学の影響を受けなかった教員仲間と共に,“大学教授人生”をも存分に楽しみつづけ、立教を定年退職後は、多摩大学・（県立）宮城大学、事業構想大学院大学の創設の責任を果たした後、初代学長の任を果たしました。

他方、学者としての私は、本邦独特の“暗くて現実離れのした”観念論的社会学とは絶縁し、戦後日本の逞しい経済成長を明らかに先導してきた成長企業の経営者、とくに創業型経営者に研究の焦点を置き、ジャーナリズムを存分に利用して思う存分に活動をしましたが、早々とピーター・ドラッカーの主著に感激してその翻訳・出版を主導したことから、彼との友情が生まれ、恐らくその縁で、30歳台に入った直後にMIT、また40歳台初めにはハーバードといった米国の名門校に好条件で招かれ、充実した研究生活を送りながら、何人もの素晴らしい米国人大学教授の友人をつくることができました。

二度にわたる米国の名門大学滞在の成果として、帰国後私は親しい財界人の協力を得てシンクタンク（財）日本総合研究所や（社）ニュービジネス協議会を次々に設置し、何れも初代所長兼任の役割を果たしました。この間、学者としての私の一貫した研究関心は「起業家と企業成長」でしたから、私は経済ジャーナリズムを十分に利用しながら可能な限り卓越した創業者型企業経営者に直接接し、実に多くのことを学び、その成果を本や論文にして残した次第です。

結び

そうだ、…以上思わず長くなったこのスピーチを、私の人生で最も大切な私事で結ばせて下さい。立教に就職した頃、私は30歳に近づき、母親も年老いて、結婚を真剣に考えねばなりませんでした。丁度その頃、私のゼミ生が連れて来た女子学生の一人と幸いお互いに気が合ったわれわれは、彼女の卒業を待って結婚したのが、私の愛する妻です。

以来、早くも60年が過ぎ、3男1女の子供達も全て40～50代前後となり、孫が合計でたった5人という物足りなさを除けば、私ども夫婦は本当に幸せに年老いつつあると常々思っています。それももともとは、僕が若くして立教大学に勤務したお蔭と、二人で感謝をしつつ幸せに年老いつつあることを私事ながらご報告して、このスピーチを終わらせていただきます。長々とご清聴、本当にありがとうございました。…立教大学万歳!（笑）

―中島 佳隆　H12営―

野田一夫氏　略歴

1927年生まれ	
1952年	東京大学社会学科卒業
1952～55年	同大学大学院特別研究生
1955年	立教大学赴任
1965年	同大学教授
1960～62年	マサチューセッツ工科大学ポストドクトラルフェロー
1967年～70年	立教大学観光学科開設にあたり初代学科長
1970年	（財）日本総合研究所設立 理事・初代所長
1975年	ハーバード大学東アジア研究所フェロー
1981～2010年	（財）日本総合研究所理事長
1985～87年	（社）ニュービジネス協議会初代理事長
1989～95年	多摩大学初代学長
1997～2001年	県立宮城大学初代学長
2012～2014年	事業構想大学院大学初代学長
現在	多摩大学名誉学長、（財）日本総合研究所名誉会長、（社）全国経営者団体連合会会長等。

立教経済人クラブ会長就任にあたっての抱負

立教経済人クラブ会長 戸井田和彦

このたび、立教経済人クラブの会長にご選任いただきました戸井田でございます。会長という大役を仰せつかり、光栄に思うと共に責任の重さに身が引き締まる思いです。

まず、前会長である和田さんにお礼申し上げます。12年間の長きにわたり会長を務められた和田さんは、立教経済人クラブに多大なる貢献をいただきました。強いリーダーシップを発揮されたご活躍に対し、心から敬意と謝意を表するとともにこの場をお借りして深く感謝申し上げます。大物の前任者を継ぐというのは若干、気が重いものがありますが、お引き受けした以上、少しでも当会発展のためにお役にたつべく頑張る所存です。

他校には、このような経済人の集まりの会は少ないように聞きます。それだけに、この会のメンバーになる方にとってより価値ある有意義なものにせねばと責任を感じております。

経済界で活躍する校友を一人でも増やしていきたい。

会の活動を通じ、経済界で活躍する校友を一人でも増やすことに貢献したいと思っています。そのためにも経済人クラブメンバー相互の活きた情報交換、人脈ネットワークづくりを活発化させ、新しい仕組み、流れを生み出すことにチャレンジしてまいりたいと思います。そして我々の企業人としての経験を、経済界を目指す学生、校友たちに伝え、彼らの活躍の場を広げていくことに貢献していきたいと思っています。

私事を事例として取り上げるのは甚だ恐縮ですが、カルロス・ゴーンの下で日産の役員としてNISSANリバイバルを経験し、その後（株）ファルテックに移り、再建そして東証一部上場という経験は何ものにも代え難いものとなりました。同じように経済人クラブ会員のお一人おひとりも、様々なご苦労とご経験をされ、現在を築かれていると思います。私たちは私達自身の持つこの経験、レガシーを会員同士また、企業家を目指す学生、校友たちに広げ、バックアップしていきたいと思います。

ご存知の方も多いと思いますが、明治の経済発展を支えた革新的企業家に、大阪の経済界で勇名をはせた岩下清周と洋菓子製造のパイオニアである森永製菓の松崎半三郎という企業家がおられます。共に立教の卒業生です。先輩たちに学び、先輩たちの持つ企業家としての革新性を大いに発揮する校友、後輩たちを一人でも多く輩出していきたいと思います。

（注）RIKKYO BOOKLET　老川慶喜　岩下清周と松崎半三郎　―立教の経済人―

会員のダイバーシティ（多様性）推進

グローバル化が叫ばれてもう何年もたちます。我々の母校立教大学もGLAP（Global Liberal Arts Program）がスタートし、グローバルに活躍するリーダーを育てることが益々重要となってきています。このような時代こそ、私たち経済人クラブも、業種や世代を超えたコミュニケーションの活発化が必要です。そのためにもより会員の「ダイバーシティ化」を推進していく必要があると思っています。

様々な業種・業界の方、上場会社の方、非上場会社の方、起業された方、これからされる方も、男性、女性問わず、そして国籍を問わず、多様な経済人、企業人の集まりとして存在することにより、それが会員相互の活きた情報となり、人脈ネットワークの広がりを生んでいくと思っております。それが結果として学生、校友への貢献度を高め、多くの経済人、企業人を育てていくことになります。

私たちを取り巻く環境が激変する中、立教経済人クラブの役割は会員にとって校友にとって益々価値あるものにしていかねばと思います。そして学生たちにとっても、もっと企業を知り、経験する接点を広げられるような場づくりを積極的に行っていきたいと思います。

その為にも立教大学、校友会はじめ他の校友団体との連携を更に重視しながら、会を遂行してまいりたいと存じます。

是非ともみなさまの立教経済人クラブへの積極的なご参加をお願いいたします。

戸井田和彦 プロフィール

1975年　立教大学経済学部経営学科を卒業。ゼミは野田一夫ゼミ。
同年 日産自動車入社。営業部門を中心に商品企画、販売促進、財務、販売会社の立ち上げ、再建・再編など広範囲に業務を経験。

2001年　カルロス・ゴーンの下で常務（SVP）に抜擢、アフターセールス部門の立ち上げ・拡大に貢献。2005年に国内部門担当となり、国内ネットワークの再編を主導した。

2010年　株式会社ファルテックに移り、代表取締役社長に就任、当時、業績が悪化していた同社を再建、2014年に東証一部に上場させた。現在同社相談役。

第1回理事会

さる2017年5月18日、本年度立教経済人クラブ第一回理事会が新橋の新橋亭（取締役会長：呉　東富様　昭41・営）にて開催されました。
18時より理事会を開始。昨年度実施された、各委員会企画事項の開催報告並びに、決算報告をさせていただきました。本年度は役員改選期ではありませんが、当クラブ会長の和田成史氏が、本年4月に立教大学校友会長に選出されたため、新会長に株式会社ファルテック代表取締役社長戸井田和彦氏（昭50・営）が就任する案、並びに本年度の運営方針と予算案をそれぞれ審議いただきました。和田会長をはじめ、各理事の皆様からご意見並びにご助言を賜り、我が立教経済人クラブ会長から校友会会長へ進まれた和田会長におかれては大変名誉あることであることや、永きに渡って会員を務められた先輩会員の方々についてはご勇退・退会された後も会としては丁重に何らかの方法で記録保持をしていくべきだというご意見などが寄せられました。

その後懇親会へと移り、倉石昇氏（昭33・経）による高らかな乾杯のご発声により開宴。今回も新橋亭　呉先輩のお計らいによりおいしい料理に舌鼓をうちました。諸先輩方の近況などを詳しく伺うことができ、定刻21時に散会となりました。引き続き各委員会の活動にご支援とご指導をお願いいたします。

―林　雄太　H7営―

特集　和田前会長インタビュー

2017年5月の総会において、和田成史氏が立教大学校友会会長に就任されたことにより、立教経済人クラブの会長職を退任され、最高顧問に就任されました。退任にあたり、12年間の会長在職中の思い出などを振り返っていただきました。

立教経済人クラブに入会されたきっかけ

IT業界の大先輩で、業界団体の会長もされていた立教の大先輩、佐藤雄二郎さん（当時立教経済人クラブ会長）と、同じく大先輩の森永製菓の松崎昭雄さん（当時立教大学校友会会長）より連絡をいただき、母校のために一緒に活動をして欲しいとお誘いを受けた。おいしい食事をご馳走になったこともあり、一つ返事で了承をしたのが、校友会と経済人クラブの活動をスタートさせたきっかけでした。

その当時は上場した直後で、自社製品の「勘定奉行」のテレビコマーシャルを流し始めたころで、会社名も知られるようになっていました。そのようなことがきっかけで、経済人クラブの朝食勉強会の講師として、創業当時から「奉行ブランド」作りの経験や、人･物･金を通してモノづくりをどうやって築いていったのか、その過程での苦労話などをお話したことが、本格的な経済人クラブの活動の開始だったでしょうか。おそらく、2001年か2002年くらいの事だったと思います。

会長になるまでの経緯

経済人クラブ入会当時は、佐藤雄二郎先輩が会長で、その後、坪野谷先輩が1期2年会長を勤められた後に会長に就任しました。

坪野谷会長時代には、経済人クラブのことをはじめとして、当時、社会人入学をして大学で勉強をされていた内容など、様々なことをお聞きする機会に恵まれて、とても良い経験になりました。そのようなこともあり、坪野谷先輩から会長を引き継ぐことになりました。

会長になられて

運営について、自分なりにいろいろ考えました。先ず、多くの人が出席できるようにして活性化させたいと思いました。特に若い人と女性が参加できて、活力のある会にしたいと思い、そうしたことを目標にしました。

その中でも、ウェルカムナイトを開催して、入会していただいた若い人たちが参加しやすいイベントを実施しました。さらに、入会した若い人たちと女性を定着化させ、運営委員会と交流を図りクラブのことを良く知ってもらうために、ホテルオークラ東京のオーキッドバーで開催していたタウンクラブをグルメ会として再スタートさせました。

最近では、女性が参加しやすいイベントとして女子会や、世代を超えた勉強会、若手の交流会といった、少人数でアットホームなイベントも開催されるようになり、これまでなかなか全体行事に出席をしていただけなかった会員の方にも参加いただけるようになりました。そうした意味では、今までと違うアクションにより、10年前では少なかった若い人や女性が、業種領域を問わず、参加しやすい成功事例になったと思っています。

一方、総会、新春名刺交換会、朝食勉強会、ゴルフ会、クリスマス会といった経済人クラブらしい行事はしっかりと継続をしました。特に、朝食勉強会は、立教のOBが関係するステータスホテルでの開催が定着できるようになりました。

講演会の講師選定では、著名なすばらしい先生方をご紹介いただきました

総会、名刺交換会と、年２回の朝食勉強会。あわせて年間４回の講師を12年間となると、講師選定は実は結構大変だった思い出です。過去に講演をしていただいた方は現在も政財界で日本の中枢などで活躍されているような方ばかりで、会員の皆さまの知識の拡大につながり、好評であったのならば良かったと思っています。私自身も、幾つかの勉強会に参加していて、そうした繋がりもあって講師をお願いしてきました。まだまだ手をつけていない勉強会もあるので（笑）、これからも協力できるところは協力していきたいと思っています。

こうした、継続していくこと、新しくチャレンジすることの二つを意識して活性化してきました。何とかやってこれた12年間だったと思っており、会長職を退任して実際ホッとしているところです。

新会長をはじめ、会員へ期待すること

先ずは、新しい執行部メンバーで新しいチャレンジをしてもらいたい。そうした活動を、これからも影ながら応援していきたいと思っています。

バトンタッチをしていく中で、大切なことはチャ

和田成史氏 略歴

1975年　立教大学経済学部卒業
1980年　公認会計士・税理士登録
　　株式会社ビック・システム・コンサルタント・グループ設立
　　代表取締役社長就任（現在に至る）
1981年　商号を株式会社オービック・ビジネス・コンサルタントに変更
1995年　商号を株式会社オービックビジネスコンサルタントに変更
2004年　（株）東京証券取引所市場第一部上場
2005年　立教経済人クラブ 会長就任
2017年　立教大学校友会 会長就任・立教経済人クラブ 最高顧問就任
　　（学）立教学院　理事就任
所属団体等　（一社）コンピューターソフトウェア協会（CSAJ） 名誉会長・理事
　　経済産業省 産業構造審議会ソフトウェア小委員会 委員
　　（一社）日本コンピュータシステム販売店協会（JCSSA） 理事
　　関東ITソフトウェア健康保険組合（ITS） 選定理事
　　（特非）ITコーディネータ協会（ITCA） 副会長
　　（公社）経済同友会 幹事

レンジしていくことであると思う。時代、世代によって、環境や仕組み、興味・関心は変るもの。そうした変化に対応していく新しいチャレンジが必要になると思います。

現在、立教大学の卒業生は20万人を突破してそのうち半数が女性であり、平成卒の人たちです。こうした若い人たちと女性を取り込んで活性化していくことが必要だと思います。産業界ではIOTが叫ばれており、世の中はグローバル化の時代。男女を問わず、日本の経済を支えるような、立教卒の若い経営者、ビジネスマンが生まれ、活躍してくれることを期待しています。経済人クラブは、そうした次の世代の人たちが多く参加して、先輩方の経験に聞いたり、交流を持つことで活性化、バックアップできる、時代に即した活動があるといいと思いますし、そうした運営に期待したいと思います。

戸井田新会長は、温和で穏やか、日産自動車時代を中心に経営者としての経験、実績も申し分ない。日頃お話になっている通り、ダイバーシティ（多様性）や人との繋がりが重要な時代に、いろいろな意味で発想力、知見を兼ね備えた方であり、おおいに期待をしています。

最高顧問に就任された抱負

やっと、会長職を全うできたばかりでまだまだそこまで考えられない状態です。会長としてやろうとしていたことを一定の形にできたことで安堵しているのが正直なところです。いずれにせよ、影ならが応援をしたい。

会長在任中に、佐藤雄二郎先輩がお亡くなりになる直前にお会いする機会があり、そのとき、「和田君、頼むよ。さらば！」と言われたことをとても良く覚えています。私にとってすばらしすぎる先輩でありました。このように、時代とともに変化することと併せて、代々受け継がれる思いというのも大切にしていけるように引き続き応援していきたい。

最後に

12年間の会長職を全うできたのは、ひとえに会員の皆さま、運営委員会のスタッフの皆さまに支えられてきた日々であったと思っております。僭越ながらこの場を借りて、会員の皆さま、運営に携わってこられた皆さまに感謝とお礼をお伝えしたいと思います。

取材を終えて

12年間というながきにわたり、会長を勤められた和田氏。ご自身の事業も含めて非常に多忙な中で、立教経済人クラブの活動にご尽力をされてきた所以を少しばかり垣間見ることができたと感じました。経済人クラブの立ち上げメンバーでもあった、佐藤雄二郎先輩との関係をはじめ、諸先輩方から受け継がれる思いを、時代に合わせて和田氏なりに活性化、推進されたことは、大変なプレッシャーの中でご苦労が多かったことだったと感じました。

今後は、経済人クラブの最高顧問、立教大学校友会会長として、さらにお忙しくなることと思いますが、益々活躍されるに違いないと思いました。経済人クラブにも、引き続きのご指導とご協力をお願いしたいと思います。

—昆　凡子　S54仏・品川 高穂　H8経—

建学の精神をたづねて

引き継ぐものたちの軌跡

神保町シンクタンク
黒田裕治（78年３月 法学部卒）

黒田裕治 プロフィール
1955年7月4日 広島県尾道市生まれ
立教高等学校 立教大学を経て
近畿日本ツーリスト株式会社に勤務
2012年、独立して安曇野シンクタンク創立に加わり、
現 神保町シンクタンクを主宰

さて、前回までのシリーズ「建学の精神をたづねて」をご愛読くださりありがとうございました。生誕の地「築地」の栄枯盛衰を中心に、「立教」の建学の歴史と幕末の日本の歴史を交差しながら文明論や文化論的アプローチを試みながら近代日本の成り立ちをたづねてきました。引き続き、建学の精神をベースに置きながら、時代時代の「人物」にフォーカスを当てて建学の精神を引き継ぐ証、引き継いだ兆しを見ていくことにいたします。しばしお付き合いのほどお願い申し上げます。

ではまず、ガーディナーをたづねて見ましょう。ジェームズ・マクドナルド・ガーディナー（James McDonald Gardiner、1857年5月22日 - 1925年11月25日）ご存知ウィリアムズ主教の要請で築地にやって来た立教大学の校長である。

wikiによりますと；アメリカ合衆国ミズーリ州東部の都市、セントルイスで生まれる。1875年、ハーバード大学へ入学するも、1877年に中退。1880年6月、チャニング・ウィリアムズの要請により聖公会伝道局から築地立教学校への派遣が決定され、9月20日にサンフランシスコを出航して、10月14日横浜へ到着。同年には立教学校第3代校長に就任する。翌年に日光でフローレンス・ピットマンに出会い、婚約する。同年から1883年にかけ、築地居留地に立教大学校（St. Paul's College）を建設し、完成後校長に就任した。一時体調を崩して帰米し、故郷で静養するも、1885年に日本へ戻る。

1891年、立教大学校長を退任。本格的に建築家としての人生を歩み始める。1894年6月20日の明治東京地震で立教学校校舎などの初期作品が被害を受ける。以来、建物の耐震性も考慮した設計を行うようになった。同年、大学時代の旧友と再会するため、また、米国各地を旅行するため再び帰国する。旅行先では日本について講演した。また、旧友の協力により論文を提出、ハーバード大学の学位を取得し卒業する。帰国後、立教大学校英語・英文学教授の地位に再び就く。1895年には、小村寿太郎らとともに日本ハーバードクラブを設立する。1903年、ガーディナー建築事務所を開業。1908年には老衰したウィリアムズとともに帰米し、リッチモンドまで送る。1925年11月25日、聖路加病院にて死去。

建築家ガーディナーとしての功績は近代西洋建築の黎明期にはとても大きな影響力を与えた人物の中の一人として各地に様々な作品を残した。もう一人の有名な建築家としてジョサイア・コンドル（Josiah Conder、1852年9月28日 - 1920年6月21日）を忘れてはならない。彼はイギリスのロンドン出身の建築家。お雇い外国人として来日し、新政府関連の建物の設計を手がけた。また工部大学校（現・東京大学工学部建築学科）の教授として辰野金吾ら、創成期の日本人建築家を育成し、明治以後の日本建築界の基礎を築いたと言える。

ガーディナーは築地居留地では、立教女学校校舎（26番地・38番地）立教大学校校舎（37番地）聖三一大聖堂（聖三一教会とも、39番地）三一神学校・寄宿舎・附属図書館（53番地）三一会館（54番地）を手がけ、京都では旧村井吉兵衛京都別邸

長楽館：ー京都市指定有形文化財ー　多くの観光客で賑わう円山公園で、ひときわ目を引く洋館があります。現在はレディースホテル・喫茶・レストランとして使用されていますが、明治時代の実業家で「煙草王」と称された村井吉兵衛の京都別邸として建設されました。外観はルネッサンス様式を基調にしていて、1階部分が石張り、2階及び3階部分がタイル貼りになっています。

室内の意匠は各部屋ごとに異なる様式になっていて、家具も当時のものがそのまま残されているそうです。家具のほとんどは、当時の日本では購入できないもので輸入されたものだったようです。大正3年には，ガーディナー、大島盈の設計により、3階和室などが改造されました。

京都の迎賓館として華やかな集いの場となっていた長楽館ですが、その名前の由来は、伊藤博文が 木戸孝允の墓参の際、完成したばかりの長楽館へ滞在し、窓からの眺望に感銘し、遍額に「長楽館」と記したことに由来しています。当時、実業家として村井吉兵衛がどれほど名を馳せた人物だったのかというのは長楽館への著名な訪問客の名前を見ると容易に想像することができます。英皇太子ウェールズ殿下、米副大統領フェアーバンクス、米財閥のロックフェラー、それに山県有明、大隈重信等が挙げられます。竣工年：1909年（明治４２年）さて、ここにコンドルとガーディナーの作品を比較してみると、コンドルの弟子、辰野金吾の代表的な建築といえば、最近元の設計図通りにリニューアル（戦争中に焼け落ちたドームは戦後２階建で復旧されたが、「復元工事」として元の3階立てに建築された）した「東京駅舎」を見れば一目瞭然、まさに西洋の建築様式をそのまま正しく伝えたものである。一方、ガーディナーの作品は築地で建てた立教大学等は大地震や大火事により倒壊した経験を踏まえ、日本の大地に適合すべく耐震性を深く研究してその工夫を取り入れた設計になっている。現に池袋キャンパスは築地から移転した新天地に建てられたわけだが、ガーディナーの教訓が生かされており（設計事務所は別会社だが基本設計はガーディナーだと言われている）関東大震災や戦時中の大地震にも一部の尖塔部分が壊れたものの大方は無事であった。また、別の建築物の事例では日本の気候特有の多湿に対応した「腰板」を取り入れたりしており、人間の生活、ひいてはその国のライフスタイルに適した設計を示しているかのようだ。その片鱗はなんと、同じ築地で発祥したミッション系青山学院大学のキャンパスで、最近遺構が発掘された新ガウチャー・ホール」は、1906（明治39）年に建設され、青山キャンパスの土地購入資金や校舎建設資金などのために、多額の寄付をしてくださったジョン・F・ガウチャー博士の名前を冠しています。設計は、現在の日本聖公会聖アグネス教会（京都市）や遺愛学院本館（函館市）を手がけたアメリカ人のJ.M.ガーディナーによるものです。

ウィリアムズ主教が召し上がった日本茶を訪ねて

第4回：世界に日本茶文化を伝える「寿月堂」丸山海苔店 丸山邦治会長

私が主宰する日本茶アンバサダー協会ではこの6月に第3回目となる公募講座を開催しました。その実技講座をご依頼させていただいたのが大先輩 丸山邦治会長の丸山海苔店が歌舞伎座に構える寿月堂 銀座歌舞伎座店です。
寿月堂は160余年の歴史をもつ老舗丸山海苔店が茶禅の精神をもとに日本茶の美しさを世界に届けるために始めた日本茶喫茶・茶葉の専門店で築地とパリ、筑波、そしてここ銀座歌舞伎座の5階にあります。隈研吾さん設計の竹を随所に使用した店内はゆったりとして都会の喧騒を忘れてしまう清らかな時空間。ここで味わう日本茶は格別です。

「文化の発信をするには場が必要。独自の世界を、しかも最初に作ること」といち早くパリに出店して揺るぎないブランドを築き、一流ホテルや高級料理店からオファーが続々と舞い込んでいます。パイオニアゆえのご苦労もあったことと思いますが「成功するまでやればいい。先発には改良する時間がある」と強い信念であたってこられました。

海苔以外に世界に通用するものをと日本茶を販売し始めたのは40年ほど前。創業100年を超える茶補があまたいる中では若い事業ですが、花王で28年、海外事業も経験するなど世界をフィールドに大企業で活躍された知見や胆力が日本茶業界では異端ともいえる高度な戦略に活かされ躍進してこられたのではないでしょうか。

この4月にはオレゴン州のポートランドジャパニーズガーデンの日本茶をプロデュースしたり、静岡の生産者と協働して有機抹茶の栽培に取り組むなど、新たなプロジェクトを続々と展開しています。
「利益は手段にすぎません。ビジネスは人、人間関係ですよ」そんな丸山会長の哲学は寿月堂だけではなく日本茶の世界への飛躍の一翼を担っている！そう感じました。

丸山会長とご縁を繋いでくださったのはOBで聖路加国際大学理事長の糸魚川順さんでした。この場を借りて御礼を申し上げます。やはり全ては人、人間関係ですね！
《寿月堂 銀座歌舞伎座店》東京都中央区築地4丁目7-5　TEL：03-3547-4747

満木葉子（みつきようこ）
株式会社ねこぱんち代表取締役/
一般社団法人日本茶アンバサダー協会代表理事
☆日本茶応援サイト『ENJOY!日本茶』
www.nihoncha.org/
☆株式会社ねこぱんちFBページ
www.facebook.com/kabushikigaisyanekopanchi/

ウェルカムナイト

2017年6月20日（火）19:00より、母校立教大学セントポールズ会館松本楼にて本年度1回目のウェルカムナイトが開催されました。ウェルカムナイトは、新入会員になった方々を中心に気軽に参加していただける懇親会で、新入会員同士また、既存の会員との交流を深める場として年2回開催しております。今回は新入会員3名を囲み戸井田新会長、井形副会長をはじめとした会員12名の計15名の参加となりました。

先の総会で就任をされた戸井田会長より、人脈を広げて立教卒業の企業人の輪を広げて行きたい。業種を超えたダイバーシティ（多様性）のある交流が盛んに行われるようになっていきたいとご挨拶をいただきました。その後、こちらも総会で就任された井形副会長に乾杯のご発声をいただき、懇親会がスタートいたしました。

今回は、セントポールズ会館での開催ということもあり学生時代の思い出話しや、野球部優勝の話題など和やかな雰囲気の中で、松本楼さんのフレンチコースを堪能いたしました。参加人数が15名ということもあり、恒例の自己紹介コーナーでは参加者全員が普段よりもちょっと長めのスピーチで以外な一面も披露されるなど、新入会員の皆さまも、今後様々なイベントに参加していただける契機になったと思います。

—品川 高穂　H8済—

新しく会員になられた方々

（敬称略）

岩瀬 浩人　平成29院ビ
（株）モーガンオート　イワセ
代表取締役
〒146-0093　東京都大田区矢向1-4-4
TEL：03-3758-6721
FAX：03-3758-6761
E-Mail：iwase@morganauto.co.jp
英国MORGAN MOTOR社　日本総代理店

内田 英二　平成26院ビ
（株）ジュピターテレコム
〒167-0043　杉並区上荻1-2-1
インテグラルタワー
TEL：03-4366-8737
FAX：03-4366-8701
情報・通信業

内田 孝嗣　平成29院ビ
（株）倭組
専務取締役
〒370-1406　群馬県藤岡市浄法寺686-7
TEL：0274-52-3559
FAX：0274-52-2901
E-Mail：yamato.gijyutu@mint.ocn.ne.jp
総合建設業

大谷 佳弘　平成6産
（株）ヒナタデザイン
代表取締役
〒101-0021　千代田区外神田6丁目11-14
アーツ千代田3331　312A
TEL：03-6240-1121
FAX：03-3834-1573
E-Mail：yosh@hinatadesigns.jp
デザイン制作、ブランディング、アプリサービ

柴﨑 大介　平成23院法
日比谷ステーション法律事務所
弁護士
〒100-0006　東京都千代田区有楽町1-7-1
有楽町電気ビル南館14階
TEL：03-5293-1775
FAX：03-5293-1776
E-Mail：daisuke.shibasaki@lawcenter.jp
弁護士業

田中　彰　昭和54法
（株）そごう-西武
サービス・教育事業部サービス受託部
〒171-0022　東京都豊島区南池袋1-17-4
池袋第二ビル2F
TEL：090-1799-2404
E-Mail：akira-tanaka@sogo-seibu.co.jp
西武百貨店そごう全店の研修教育実施講師

新美 智彦　平成9産
監査法人トーマツ
マネージャー
〒100-0005　東京都千代田区丸の内3-3-1
新東京ビル
E-Mail：tomohiko.niimi@tohmatsu.co.jp
監査

保坂　学　平成15経
合同会社　西友・JAPAN Walmart
〒115-0045　東京都北区赤羽二丁目1番1号
TEL：03-3598-7000
Retail,Wholesaler・小売・サービス　流通

村田　淳　昭和59営
（株）村田金箔
代表取締役社長
〒112-8634　東京都文京区大塚3丁目21番4号
TEL：03-3947-5300
FAX：03-3947-6999
E-Mail：j-murata-kimpaku.com
金箔・転写箔・ホログラム製造・販売業

森　健輔　昭和52立高
森平舞台機構（株）
代表取締役
〒111-0033　東京都台東区花川戸2丁目11-2
TEL：03-3842-1621
FAX：03-3845-1766
E-Mail：mori@morihei.com
劇場等舞台機構の設計、製作、工事 保守

2017年度 事業計画書

2017年9月19日	女子会	場所未定	（募集）
2017年10月4日	朝食勉強会	場所未定	（募集）
2017年10月17日	グルメ会	場所未定	（募集）
2017年11月21日	ウェルカムナイト	場所未定	（募集）
2017年12月2日	第72回ゴルフ会	場所未定	（募集）
2017年12月5日	クリスマスパーティー	場所未定	（募集）

運営委員会に参加しませんか?

経済人クラブの運営を手助けしてくれる有志を求めております。毎月1回の運営委員会に参加して頂き（本業優先で結構）、自分の役割を片手間にこなして頂くだけです。特別な資格、スキルは一切要りません。本業に影響が出るようなこともありません。必要なのは、経済人クラブの仲間と交流したいと思う気持ちだけかな!? 打合せ終了後の飲み会が楽しみかも？

会報委員会、活性化委員会から

会報委員会では引き続き、ホームページ、facebookを活用して、立教経済人クラブのブランディング、会員増強を支援していきます。

昨年度より始めたネット（facebook）広告も少しづつ効果が出てきているように感じます。『会員が増える＝若い会員が増える＝経済人クラブが活気付く』若い会員が積極的に会に参加したくなるよう、情報発信の場作りも支援したいと思っております。皆さまからの積極的な出稿、投稿をお待ちしております。

また、会報制作に関わってみたい方、奮ってご参加ください。経済人クラブに溶け込むきっかけになること請けあいます。　―徳澄 範光　S62数―

活性化委員会が担当する事業は、グルメ会、女子会、ウェルカムナイト、クリスマスパーティ、世代を超えた勉強会と様々です。

クリスマスパーティでは、ご家族や社員の皆さまにも楽しんでいただけるような、立教らしいアットホームなパーティを企画しております。グルメ会では、普段は行けないようなお店を厳選し、美味しい食事とお酒を堪能できます。ウェルカムナイトでは、新入会員の皆様を囲んで、先輩会員と新入会員の交流の場を創っております。

立教経済人クラブに入会したものの、しばらくイベントに参加していないという皆さまに向けて、参加したくなるような企画を考えていきますので、皆さまのご参加をお待ちしております。　―二瓶　豊　H10法―

立教経済人クラブ ウェブサイト
http://www.r-keizaijin.net
立教経済人クラブでの、過去の行事や活動はウェブサイトでご覧頂けます。

Facebookで、立教経済人クラブのグループに参加しよう!
セミナーや新製品の告知、交流の場としてドシドシ投稿してください。